

# ドゥルーズ哲学を読む

2022年10月27日（木）岩田 直樹

（2022年10月26日（水）27日（木）作成）

- 1 参考文献—ドゥルーズを読む前に
- 2 フランス（西欧）の思想的背景  
—哲学者と著作で辿る
- 3 ドゥルーズの略歴と主要著書
- 4 なぜ今、ドゥルーズを読むのか  
—日本での受容の仕方を振り返りつつ

# 1 参考文献 — ドウルーズを読む前に

## 【参考文献（解説書） 7月中旬～9月上旬に読んだ順】

○お薦め、△読んでもいいかな、×さっぱりわからない

- ・船木亨『ドウルーズ』 清水書院、1994年

○最初に読むべき本。入門書であり、それ以上でも以下でもない。

- ・檜垣立哉『ドウルーズ 解けない問いを生きる』

ちくま学芸文庫、2019年、増補新版（原著2002年+書き下ろし）

△ドウルーズ解釈の一例。暇があれば。ドウルーズ哲学そのもの？ではない。

- ・篠原資明『ドウルーズ ノマドロジー』 講談社、1997年

×時間の無駄。どうしてこんなにわかりにくく書くのか。

- ・小泉義之『ドウルーズの哲学 生命・自然・未来のために』

講談社学術文庫、2015年（原著2000年）

△著者独自の癖のある読み。解説ではない。私の好みではないが、面白いと思う人もいるのでは。

## 【参考文献（解説書） 7月中旬～9月上旬に読んだ順】

○お薦め、△読んでもいいかな、×さっぱりわからない

- ・ 宇野邦一『ドゥルーズ 流動の哲学』

講談社学術文庫、2020年、増補改訂（原著2001年）

○船木の本の次に読むべき。直接師事した著者による主要著書の丁寧な解説。

ドゥルーズを読んだ後の知識の整理にも大変役立つ。

- ・ 國分功一郎『ドゥルーズの哲学原理』 岩波現代全書、2013年

○ドゥルーズを読んだ後で。哲学の内容というより、方法論がよくわかる。

ドゥルーズを読む前と読んだ後の2回読んだ。

- ・ 檜垣立哉『ドゥルーズ入門』 ちくま新書、2009年

×「入門」と銘打っているが、概念の羅列で意味不明の箇所が多い。

『差異と反復』『意味の論理学』読了後に読んだが、お金の無駄。これら

2著作（前期ドゥルーズ）の解説らしいが、さっぱりわからなかった。

## 【参考文献（解説書） 7月中旬～9月上旬に読んだ順】

○お薦め、△読んでもいいかな、×さっぱりわからない

- ・ 仲正昌樹『ドゥルーズ+ガタリ〈アンチ・オイディプス〉入門講義』

作品社、2016年

○2016年から2017年にかけて行った社会人対象の講義（全6回）。

『アンチ・オイディプス』を予備知識なしで読むのは無謀。事前に読んでいて正解だった。背景が詳しく語られる。『オイディプス』挑戦前に必ず読むべき。

- ・ 浅田彰『構造と力 記号論を超えて』勁草書房、1983年（22年5月第58刷）

○刊行当時、社会現象となったベストセラー。約40年経っても売れ続けている。

よくまとめられているが中級レベルであり、当時の読者10数万人のうち理解できたのは千人（1%）？ 構造主義、ポスト構造主義に興味を持つ人はぜひ。

## 【参考文献（解説書） 9・10月に読んだ本】※5月に読んだ

○お薦め、△読んでもいいかな、×さっぱりわからない

- ・千葉雅也『現代思想入門』※ 講談社現代新書、2022年3月

○ドゥルーズ哲学を読むきっかけとなった本。浅田彰『構造と力』以来の快著、という書評も出ている必須本。決して難しくない。23年4月「読む会」の本。

- ・千葉雅也『動きすぎてはいけない ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』

河出文庫、2017年（原書2013年）

△初の単著かつ出世作。博士論文でとても難しい。（デリダ論で有名な東浩紀『存在論的、郵便的』1998年も初の単著かつ博士論文）。刊行当時に大きな話題になった。ドゥルーズ哲学の一解釈で、通常理解とは少し離れている。「なるほど、へえー」といった読後感。

- ・仲正昌樹『集中講義！日本の現代思想 ポストモダンとは何だったのか』

NHK出版、2006年（22年4月第10刷）

○戦後の日本思想の流れがよくわかる必須本。23年5月「読む会」の本。

## 2 フランス（西欧）の思想的背景 —哲学者と著作で辿る

## (1) 19世紀末から20世紀初頭にかけての主な潮流

ア) 精神分析 フロイト (1856-1939) 無意識の発見

『夢判断』1900年 『精神分析入門』1917年

イ) 現象学 フッサール (1859-1938) 志向性、生活世界の発見

『厳密な学としての哲学』1911年

『純粹現象学と現象学的哲学のための諸考想』 (通称『イデー』) 1913年

『デカルト的省察』1931年

『ヨーロッパ諸科学の危機と超越論的現象学』1936年 (未完)

ウ) 生の哲学 ベルクソン (1859-1941) 持続、エラン・ヴィタルの発見

『時間と自由』1889年 『創造的進化』1907年 『道徳と宗教の二源泉』1932年

エ) マルクス主義 疎外、虚偽意識の発見

ルカーチ (1885-1971) c f. マルクス (1818-1883)

『歴史と階級意識』1923年

## (2) 第1次大戦後から20世紀半ばにかけて

ア) 精神分析 ラカン (1901-1981) 『エクリ』 1966年 無意識の構造化

イ) 現象学 ハイデガー (1889-1976) 『存在と時間』 1927年

ナチズムに接近

サルトル (1905-1981) 『存在と無』 1943年

前期フッサールの流れを汲む。マルクス主義に接近。

メルロ＝ポンティ (1908-1961) 『知覚の現象学』 1945年

後期フッサールの流れを汲む。ウ) 生の哲学と親和性。

エ) マルクス主義 アルチュセール (1918-1990) 構造主義的方法論

『資本論を読む』 『マルクスのために』 1965年

オ) フランクフルト学派 (批判理論) 精神分析とマルクス主義の流れを汲む。

アドルノ (1903-1969) ホルクハイマー (1895-1973)

『啓蒙の弁証法』 1947年

アドルノ 『ミニマ・モラリア』 1951年 『否定弁証法』 1966年

### (3) 20世紀半ば以降の新しい潮流

カ) 公共性     ハーバーマス (1929-)     フランクフルト学派

『公共性の構造転換』1962年

『コミュニケーション的行為の理論』1981年

アーレント (1906-1975)     ハイデガーの弟子

『全体主義の起原』1951年     『人間の条件』1958年

キ) 構造主義     リクールの批判「超越論的主体なきカント主義」

ソシュール (1857-1913)     『一般言語学講義』1926年

言語論的転回、構造論革命の先駆者

レヴィ=ストロース (1908-2009)

『親族の基本構造』1949年     『野生の思考』1962年

ラカン (1901-1981、前掲)     『エクリ』1966年

フーコー (1926-1984)

『狂気の歴史』1961年 『言葉と物』1966年 『監獄の誕生』1975年



### (3) 20世紀半ば以降の新しい潮流

#### ケ) ポスト構造主義

##### 教科書的図式

一方で 現象学→実存主義→アンチ実存主義としての構造主義→ポスト構造主義

他方で 西欧マルクス主義の流れ（アンチも含めて）

しかし、ここまで見てきた通り、著作の刊行年、思想的立場（一人の哲学者でも、次第に立場が変わっていく）などがハイブリッド状態であり、単純には図式化できない。

敢えて「ポスト構造主義」という名称で一括りすれば……

デリダ（1930－2004） 脱構築（差延）の哲学

『エクリチュールと差異』『グラマトロジーについて』『声と現象』1967年

ドゥルーズ（1925－1995、後述） 差異と反復の哲学

ヒューム、ベルクソン、ニーチェ、スピノザの哲学が源泉

この二人が代表的な哲学者となる。デリダ、ドゥルーズ、フーコーは同世代人。

# 3 ドウルーズの略歴と主要著書

## (1) ジル・ドゥルーズの略歴と著作刊行年

- 1925年 パリ生まれ。父はエンジニア、二人兄弟の兄はレジスタンスとして死亡。
- 1944年 ソルボンヌ大学へ。指導教官イポリットとカンギレム、トゥルニエと同期。
- 1948年 哲学の大学教授資格試験に合格、1957年までアミアン、オルレアン、パリのリセ（高校）で哲学教授として勤務。1952年、フーコーと出会う。
- 1953年 ヒューム論『経験論と主体性』
- 1957年 ソルボンヌ大学助手
- 1960年 国立科学研究センター研究員
- 1963年 『カントの批判哲学』
- 1964年 リヨン大学助教授 『プルーストとシーニュ』
- 1965年 『ニーチェ』
- 1966年 『ベルクソンの哲学』
- 1968年 国家博士号資格論文『差異と反復』 副論文『スピノザと表現の問題』

(1) ジル・ドゥルーズの略歴と著作刊行年（続き）

1969年 パリ第8大学（ヴァンセンヌ校）教授。ヴァンセンヌ校は1968年5月革命を契機に革新的な高等教育機関としてこの年に新設（精神分析学、地政学、映画学、ジェンダー研究など）。フーコー、リオタール、セール、バディウらが勤務。「ヴァンセンヌ実験大学センター」と呼ばれた。1980年にサン＝ドニに移転。ガタリと出会う。『意味の論理学』刊行。

1972年 ガタリとの共著『アンチ・オイディプス』

1975年 ガタリとの共著『カフカ』

1980年 ガタリとの共著『千のプラトー』

1983年 『シネマ1 運動イメージ』 1985年 『シネマ2 時間イメージ』

1986年 『フーコー』 1988年 『襞 ライプニッツとバロック』

1991年 ガタリとの最後の共著『哲学とは何か』

1992年 肺機能が停止し、人工呼吸器に依存

1995年 11月4日 パリの自宅アパルトマンより投身自殺。享年70歳。

(2) 主要著作 (なるべく日常言語で説明、読んだ順)

①その前に、ドゥルーズの大前提とは

主体 (人間) が最初から存在しているのではなく、後から生まれる。

・ベルクソンの影響

→生のエネルギー (性化されないリビドーのようなもの) の大きな流れ

・ヒュームの影響

→現象の流れから偶然によって主体が生まれる (いかにして主体が誕生するか)。

・ニーチェの影響

→永遠回帰は、同じものの繰り返しではない。

・スピノザの影響

→一元的な自然の存在 (神即自然)

→存在に階層はない (ドゥンス・スコトゥスの存在の一義性)



世界 (生命と非生命の分化以前の自然) には生のエネルギーが充満しており、そこから現象が発生する。現象の中の一例が主体化 (人間の誕生) である。

## (2) 主要著作（なるべく日常言語で説明、読んだ順）

- ①『差異と反復』1968年（邦訳1992年、河出文庫2007年、全2巻、上巻21年第7刷）  
国家博士号資格論文、それ以降の著作と異なり「いかにも哲学書」といった構成

- ・ 仮想敵はプラトンの「イデア」、ヘーゲルの「同一性」など
  - 「同じ」の静的な固定化（閉鎖系）は、動的な変化（開放系）を妨げる。
  - 「表象 = 再現前化représentation」への執拗な攻撃
- ・ ドゥルーズの狙い
  - 「同じ」を前提とする思考を徹底的に批判し、「差異」に基づく哲学を展開
  - 不可能を可能？とするアクロバティックな試み（成功しているのか？）
- ・ 差異（異なること、同一性の否定）と反復（同じものが繰り返されること）
  - 差異と反復は対立概念。差異が反復されることは日常的思考ではあり得ない。
- ・ 三つの反復（習慣、記憶、考える自我 = コギト）
  - これらの能動的な反復には微細な受動的な差異が潜んでいる。反復≡差異。

## (2) 主要著作（なるべく日常言語で説明、読んだ順）

### ① 『差異と反復』 1968年（続き）

- ・ 何にでも生成する可能性の「胚」（iPS細胞のようなもの？）、個体化する以前の潜在的な差異（差異が発現する以前の、差異を含んだ潜性態）を「理念」と定義。  
→ふつう（ドゥルーズ以前の「日常的思考では」の意）は「理念」＝「不変、同じもの」。変わらないと考えられているもの／ことが微細な差異を含んでいる。
- ・ 量と質（量的差異と質的差異）はふつうは異なる。  
→量的差異と質的差異に分化する以前の根源的・即自的差異を「強度」と定義。
- ・ 差異と反復、理念と強度の哲学→生成変化・カオスモス・永遠回帰の哲学へ
- ・ 『差異と反復』の大きな特徴は、フロイトの影がほとんど見られないこと。

### 【概念（キーワード）】

差異、反復、理念、強度、永遠回帰、潜在性（現働性）、差異的＝微分的、存在の一義性、受動的綜合 等々

(2) 主要著作 (なるべく日常言語で説明、読んだ順)

② 『意味の論理学』 1969年 (邦訳1987年、河出文庫2007年、全2巻、上巻20年第5刷)

『差異と反復』の3分の2の分量だが、難しさは10倍以上? 理解不能な箇所が半分以上はあり、読み進むのがとても苦痛な本。

難しさも苦痛の原因ではあるが、日本的思考に論理学的思考が乏しいのも原因の一つかも。日本的な西欧哲学に欠けているのは論理学と美学だと言われている。

- ・ 当時流行っていたデリダの脱構築 (エクリチュールの意味のずれ) の哲学に対抗して、ドゥルーズ独自の方法論を提示?
- ・ 34の「セリー」から成る。セリーとは「12音技法による楽曲の基礎形態として設定された音列。12種類の音 (オクターブは異なってもよい) を平等に扱うため省略、重複することなく配列した音列で、そこではどの一つの音も他の11の音すべてが現れるまでけっしてふたたび用いられることはない。」 (コトバンク)
- ・ 後半に精神分析、オイディプス・コンプレックスが登場

(2) 主要著作 (なるべく日常言語で説明、読んだ順)

② 『意味の論理学』 1969年 (続き)

・ 1 次的秩序 / 2 次的組成 / 3 次的配列

→ 分裂症的な深層身体 (ノイズ的装置) / 表面・表層・皮膚の身体 (パロール = 言語行為) / 高所の声・時間 (クロノス)

→ 前ソクラテス的 / ストア派 / プラトン → 分裂症的態勢 / 神経症的位相 / 躁鬱的・抑鬱的場面 → 風刺 / ユーモア / イロニー → 不定詞 / 動詞 / 名詞

・ 意味のパラドックス、「意味⇒言葉⇒意味⇒言葉⇒……」の無限後退を防ぐため

→ 表層 = 意味、深層 = 無意味 → 表層 = 意味の動的関係 (動的変化)

→ 深層 ⇔ 表層 (皮膚)、出来事・意味の発生の現場を記述。

→ 「存在の深淵」「深層の無秩序」といった安易な表現を排除。慎重さが難しさへ。

【概念 (キーワード)】

ルイス・キャロル、アルトー、意味・無意味、パラドックス、クロノス (現在) ・ アイオーン (過去・未来)、深層・表層、分裂症的 等々

(2) 主要著作 (なるべく日常言語で説明、読んだ順)

- ③ 『アンチ・オイディプス』 1972年 (邦訳1986年、河出文庫2006年、全2巻、上巻20年11刷)  
ガタリとの共著。概念はガタリ (精神科医、ラカン派から離脱)、構成はドゥルーズ。  
(著者は誰でもいい地点へ到達すること。cf. 『千のプラトー』 「序ーリゾーム」)  
とても難解だが、『差異と反復』『意味の論理学』に比べれば相対的に読みやすい。  
いきなり出て来る奇抜な概念に翻弄される。雰囲気をつんで読み進みたいが、なかなかそうもいかない。しかし、本書と『千のプラトー』は読む価値がある。(今回  
取り上げた『差異と反復』『意味の論理学』『哲学とは何か』は相当の時間的余裕と  
体力がない限りは、挑戦しない方がよい?)

- ・ 大前提 (下記の視点で読むと、訳のわからない議論についていける?)
  - 分化以前の欲望 (= 欲動 ≠ 欲求) の大きな流れが、精神分析のオイディプス・コンプレックス概念 (パパーママー子のオイディプス三角形) に妨げられている。
  - オイディプス三角形を壊滅させて欲望の解放を! cf. 一回性vs反復 (差異)
  - 欲望 (機械) の世界史 (人類史) の試み

## (2) 主要著作（なるべく日常言語で説明、読んだ順）

### ③ 『アンチ・オイディプス』 1972年（続き）

- ・ 『千のプラトー』 と共通の副題は「資本主義と分裂症」
- ・ 未分化の欲望のエネルギー（非主体的・非人称的な「器官なき身体」）がオイディプス帝国主義によっていかなる社会的経済的過程（生産・登録・消費の三過程）を辿るか
- ・ 世界史の第1段階としての部族社会（原始土地機械）、出自と縁組（交換関係）、コード化  
→第2段階としての帝国（国家、専制君主装置）、土地所有、官僚制、文字支配、ローマ皇帝による近親相姦、超コード化（外部から到来する専制君主による）、パラノイア・倒錯的  
→第3段階としての資本主義（文明資本機械）、一方で欲望を刺激し多様化させるが他方では欲望の実現を遅延し排除する相矛盾するシニカルなシステム、分裂症的、脱コード化、公理系、欲望のオイディプス三角形への内部化  
→精神分析から分裂分析へ、多様な欲望の発現を肯定すること（脱資本主義の道筋は提示されていない）

### 【概念（キーワード）】

○○機械（深層と表層を往還する装置？）、器官なき身体、オイディプス、コード化・超コード化・脱コード化、脱領土化・再領土化、モルの／分子的、n個の性 等々

(2) 主要著作 (なるべく日常言語で説明、読んだ順)

④ 『千のプラトー』 1980年 (邦訳1994年、河出文庫2010年、全3巻、上巻22年6刷)

ガタリとの共著。副題は「資本主義と分裂症」。『アンチ・オイディプス』の続編。各章 (セリー?) に日付が付される。例えば「6 1947年11月28日ーいかにして器官なき身体を獲得できるか」のように。

『アンチ・オイディプス』から8年後の刊行であり、同じ概念でも意味がずれている場合があるので要注意。「差異と反復」の実践か。

「プラトー」とは高原 (状態)、大地の意味。一時的に進歩? が停滞する場所。

- ・ 前述のとおり、「序ーリゾーム」冒頭に2人で書いたことについての記述あり。  
→ 「われわれは『アンチ・オイディプス』を二人で書いた。二人それぞれが数人だったのだから、それだけでもう多数になっていた。…私と言うか言わないかが、もはやまったく重要でないような地点に到達することだ。われわれはもはやわれわれ自身ではない。…われわれは助けられ、吸いこまれ、多数化されたのである。」 (上巻15頁)

## (2) 主要著作（なるべく日常言語で説明、読んだ順）

### ④ 『千のプラトー』 1980年（続き）

#### ・ 「リゾーム」概念の導入

→ 樹木（中心＝幹からの距離による序列、対称性、規則性）をモデルとする秩序から  
リゾーム（中心・階層・序列・二項対立・同型反復がなく、無限に連結・飛躍・逸脱・  
横断する要素の連鎖）へ。リゾームは決してアナーキーでも無秩序ではない。

より包括的な軽やかな統一？が可能になる。世界中が瞬時につながるネット社会を予言？)

・ 15のプラトー → 精神分析、道徳の地層、言語学、身体、顔、ミクロ政治学、リトルネロ  
（リフレーン）、遊牧論と戦争機械、平滑平面・条理平面などについて、前著の分裂分析とリ  
ゾーム的な手法を用いて論じられていく。

→ 「何ものかを正確に指し示すためにはどうしても非正確な表現が必要なのだ。…非正確さはいささかも近似値などではなく、逆に起こりつつあることの正確な経路なのだ。」（上51頁）

#### 【概念（キーワード）】

リゾーム、間接話法、アレンジメント、リトルネロ、脱領土化、地図、群れ、分子、  
遊牧性（ノマディズム）、戦争機械、平滑空間 等々

(2) 主要著作（なるべく日常言語で説明、読んだ順）

⑤『哲学とは何か』1991年（邦訳1997年、河出文庫2012年、2021年2刷）

ガタリとの最後の共著。冒頭に、人が「哲学とは何か」と問うようになるのは老年・晩年を迎えてからだ、といった趣旨の告白？がある。私も全面的に賛同する。主要著作（個別哲学者の研究書を除く）の中では最も短い。だからと言って、読みやすくはない。

「哲学とは何か」がメイン・テーマではあるが、後半は哲学・科学・芸術の連関についてかなりの分量が割かれている。

- ・ 哲学的思考は概念を創造。 cf. 「コギト」の3要素「疑う」「考える」「存在する」  
→ 概念の4つの特徴。「差異と反復」「リゾーム」が通奏低音。
  - ア) 概念相互の外的共立性（外部の概念に開かれていること）
  - イ) 概念を形成する諸要素の内的共立性（概念内部のリゾーム的分岐）
  - ウ) 概念を形成する諸要素の変異の不可分性（各要素が生成変化していく）
  - エ) 概念相互の共鳴性（アと関連）

## (2) 主要著作（なるべく日常言語で説明、読んだ順）

### ⑤ 『哲学とは何か』 1991年（続き）

#### ・ 内在平面と概念的人物

→例えば、デカルト哲学は「コギト」という固有の概念を創造し、「疑う」「考える」「存在する」の諸要素は内在平面（前著では「平滑空間」）によって規定。

「コギト」は公的教授であるスコラ哲学者に対抗して私的思想家としての「愚者」（l'idiotという概念的人物）を創造する。同様に、ニーチェは概念「永遠回帰」、概念的人物「ツアラトウストラ」を創造。cf.プラトンのイデアとソクラテス

#### ・ 哲学、科学、芸術のカオスへの向かい合い方（相互依存性）

→哲学の3要素は、概念、内在平面、概念的人物

→科学の3要素は、ファンクション（関数）、準拠平面（連係平面）、部分観測者

→芸術の3要素は、感覚＝感性的形象、合成＝創作平面、美的＝感性的形象

### 【概念（キーワード）】

概念、内在平面、概念的人物、哲学地理、ファンクション、見通し、被知覚態 等々

### (3) その他に読んだ本

- ・『カントの批判哲学 諸能力の理説』1963年（法政大学出版局1984年、98年9刷）  
カントを勉強したときに、ドゥルーズが何者か知らず読んだ本。よくある解説書
- ・『プルーストとシーニュ 文学機械としての『失われたときを求めて』（増補版）』  
1964・1970・1976年（法政大学出版局1974年、増補版1977年、2008年10刷）  
鈴木道彦訳『失われたときを求めて』全13巻を読了後に読んだ本。理解不能。
- ・『記号と事件 1972－1990年の対話』1990年（邦訳1992年、河出文庫2007年、  
2021年7刷）  
対話と短文を所収。本文366頁のうち映画論が110頁もある。観たこともない映画  
について語られても理解できない。
- ・芳川泰久・堀千晶『増補新版 ドゥルーズ キーワード89』（せりか書房2015年、  
2021年2刷）  
これを読んでドゥルーズ哲学がわかるわけではない。辞書代わりに使えばよい本。  
巻末のドゥルーズ・ビブリオグラフィ（70頁分）は貴重。

# 4 なぜ今、ドウルーズを読むのか —日本での受容の仕方を振り返りつつ

仲正昌樹『集中講義！日本の現代思想 ポストモダンとは何だったのか』に依拠

- 第2次大戦後から1970年代にかけて
  - マルクス主義と市民派・進歩派（吉本隆明、丸山真男）の2つの流れ
  - マルクス主義の内部分裂、廣松渉（新左翼理論家）は過激行動を諫める役回り
  - 吉本隆明の民俗学回帰（共同幻想論、大衆の原像）、丸山真男の近代主義（市民革命）
  - 1969年を経て、革命の非現実性が露呈
- 1970年代後半から1990年代にかけて
  - 高度経済成長によって、ブルジョア／プロレタリア二元論が失効
  - 高度消費社会到来、ボードリヤールの受容、『なんとなく、クリスタル』（80年）
  - 構造主義の翻訳が相次ぐ（現象学、実存主義はそれ以前）、レヴィ＝ストロース『野生の思考』（76年）、フーコー『言葉と物』（74年）、バルト『テクストの快楽』（77年）など

- ポスト構造主義のデリダ『グラマトロジーについて』（邦訳1976年）、『エクリチュールと差異』（邦訳上巻77年、下巻83年）
- 当時は、構造主義／ポスト構造主義は文化人類学、文学として読まれており、フランス本国のようなアンチ・マルクス主義としての読解はなされていない。
- リオタール『ポストモダンの条件』（1979年、邦訳86年）で「大きな物語」の終焉を宣言。近代的主体がすべてを説明できる統一的理論を構築することは不可能になる。
- 浅田彰の登場。『構造と力』（1983年）でプレモダン・モダン・ポストモダンを軽やかに鮮やかに解説し10数万部のベストセラーに。
- ニュー・アカ（ニュー・アカデミズム）の誕生と拡がり。山口昌男、栗本慎一郎、中沢新一ら。受け皿は新設された大学文系の国際○○学部や総合△△学部など。1986年、東京大学教養学部にニュー・アカ系「表象文化論」講座が設立されたことは象徴的（88年に中沢の助教授登用を学内政治で拒否）。
- 東浩紀『存在論的、郵便的』（1998年）以降、ニュー・アカは終焉へ向かう。

- なぜ今、ドゥルーズを読むのか
  - 冷戦（1945年2月－1989年12月）終結後、西側世界の民主主義が勝利し、新しい時代が到来する、と世界中の多くの人々が考えた。
  - 現在、ロシア、中国（もちろんアメリカ）の覇権主義が、世界を分断している。新冷戦の始まり？
  - 冷戦終結以降、目立った哲学・思想は生まれていない。困難な時代にこそ、画期的な哲学・思想は生まれる？
  - ドゥルーズは、マルクスのように社会変革の処方箋を示していない。グローバル資本主義が極限にまで進みつつある現在、脱コード化、脱領土化といった概念は有効性を失っていない。
  - ドゥルーズ（+ガタリ）の哲学は、人々を抑圧するファシズムとは対蹠点に位置する。
  - 社会哲学としてではなく、社会倫理学として読むことができるのではないか。